オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム
１．存在論と聖書
２．創造――フィロン、アウグスティヌス
３．契約――社会契約説 4/30
４．知恵――カント　5/7
５．堕罪・悪――リクール　5/14
６．歴史――ヘーゲル　5/21
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム　5/28
８．愛――パスカル　6/4
９．自己――キルケゴール　6/11
１０．死――ハイデッガー　6/25
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２～１４．受講者の研究発表　7/9, 16, 23

１．存在論と聖書

（1）在りて在る者

「3:14　神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」15　神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名／これこそ、世々にわたしの呼び名」（出エジプト）。ＬＸＸ：ト・オンではなく、ホ・オン

（2）芦名定道「現代思想と〈神〉の問い―ティリッヒからジジェクまで―」

１．近代以降の思想状況、現代社会の世俗化、形而上学的神の死。
　ボンヘッファーが獄中で展開した「成人した世界」における「非宗教的キリスト教」。
２．近代の宗教批判：フォイエルバッハからマルクス、フロイト（啓蒙的合理性に基づく宗教批判）／ニーチェからポストモダン（啓蒙的合理性の解体をもめざす宗教批判）
　ハイデガー『形而上学とは何か』「序論」、「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」「存在するものと存在との混同」「存在忘却」（Seinsvergessenheit）。普遍的な特徴の意味において（存在論）、他方では、最　高の従って神的なものの意味において（神論）。
　　西洋の思惟の総体としての「存在―神論」（Onto-Theo-Logie）を視野に入れてなされた、プラトニズム的キリスト教的な神、特にその強い神（最高価値としての神）への徹底した批判。
３．ティリッヒ『聖書の宗教と究極的実在の探究』
　聖書的な思惟とギリシア的哲学的な思惟（形而上学）との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で、「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」点を明らかにする。
４．「自らを問う存在者」、「有限性の中で存在を問う存在者」としての人間→存在論「存在するものの諸領域における存在の現前とその諸構造」についての「存在論的な分析」。
５．聖書の宗教と存在論との決定的な相違。聖書の「人格主義」（personalism）。
　「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」。
　人格主義：神を個別性において、つまり、「一存在者」として経験する。
　存在論的思惟によって構成された神概念＝「存在自体」（Being-itself）：
　　「存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」（ibid., 368）、存在論的な問いにおいて、人格的な神の個別性は超越される。

６．神と人間の人格的関係：自由な相互性に基づいており、「聖書の宗教の動的な性格の根源」を成している。神の人間創造は自由な人格としての人間存在の創造であり、こうして人間は創造の善性にも関わらず、堕罪の可能性をも有する自由な主体となった。

７．祈りという宗教的行為：聖書的な人格の相互性は、存在論的神観念（形而上学的な神）に矛盾する。自由な相互関係が時間、空間、因果律、実体といったカテゴリー内部で成立するのに対して、存在自体はこれらのカテゴリーを超越している。

８．言葉：「人格と人格との関係性は言葉を通して現実となる」。啓示は言葉による神の語りかけであり、人間は聴くように求められる。これに対して、「存在論は別のカテゴリーで思考する」（ibid., 369）。人間と存在自体との関係は直接的であり、言葉によって媒介されるものではない。

９．聖書の宗教と存在論的思惟との相違また対立を前提としつつも、ティリッヒは、聖書の宗教も存在論的問いを免れることはできないと主張する。たとえば、「あらゆる真の祈りにおいて、神はわれわれの祈る相手であると同時に、われわれを通して祈る者である。なぜなら、神の霊こそが正しい祈りをつくり出すからである」（ibid., 387）。その意味で、神は人間にとって、その人間自身よりもさらに近い関係（直接的な）にある。祈りにおける神は、通俗的な人格イメージを越えた存在であり、むしろ存在論的思惟と接する地点に立っている。

10.「存在論的な問いを問うことは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいう、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのそれ自身の否定である。」

２．創造――フィロン、アウグスティヌス

＜問題＞

・ヘレニズムとヘブライズム、存在論と聖書の最初の本格的な接点としてのヘレニズム・ユダヤ教、そのキリスト教への影響

・宇宙論的問題の地平における相互関係→対話と論争の可能性（自然神学）

・ユダヤ教とキリスト教との関係：ユダヤ教はキリスト教の母体である。

　　キリスト教への多層的・多面的な影響

　　聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

１．創世記１章

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

4 神は光を見て、良しとされた。

……

27　神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

２．創世記２章

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

（1）アレクサンドリアのフィロン（BC.25-AD.45/50）

１．二段階創造論：『世界の創造』（教文館）
「およそ存在しているものは、「能動的原因」と「受動的なもの」とからなる」「「能動的なもの」とは全世界を統べる「知性」（ヌース）」、「「受動的なもの」とは、それ自体としては生命（魂）を持たず、また自ら動くことはできないもの」（12）
「父なる創造者（デーミウールゴス）が「生まれたもの」に配慮するのは理の当然」（13）
「この世界は六日間でつくられた」（13）、「「生成するもの」の方が「秩序」を必要としてから」、「「秩序」に欠かせないのは「数」」、「奇数は男性、偶数は女性」「完全数「六」」（14）
「神は、「巨大都市」（メガロポリス）をつくろうとして、まず都市の様々な部分の原型を構想した。つまり神は、その原型を素材にして、「可知的な世界」を構想した上で、それを手本として用いながら「可感的な世界」も仕上げていったのである。」（15）
「今つくられた人間は、可感的であり、かくして性状を持っており、身体と魂とから成り、男か女かであり、本性的に死すべきものであるが、これに対し、神の似像になぞらえてつくられた人間の方は、ある種のイデア、類、印章であり、可知的な非物体的であり、男でも女でもなく、本性的に不滅だからである。」（52）

第一創造物語→可知的人間（人間のイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）
神の像
↓
キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。
アウグスティヌスによる創世記注解

２．フィロンのロゴス論
「フィロンのロゴス論の真の意図は、伝統的なヘブライ的神観から、神と世界、啓示と理性、信仰と哲学との二つの異質的原理が、なんらの第三者的中間者を媒介し、あるいはまた直接的に連続することなく、それぞれ絶対的断絶性を保持しつつ、しかも相互に関係しうる原理を確立することであったとみるべきであろう」（平石、285）、「神は世界を創造し、摂理をもって支配するが、世界もまたこのような神的生命の創造過程に参与しているのである。フィロンはこのような神と世界との「非連続の連続」の関係を成立せしめる原理を、象徴的相関性としての「神のロゴス」として把握したのである」、「ロゴスの二重性」、「フィロンの「ロゴス」は神の世界創造の宇宙論的原理であると言いうるであろう」（286）、「第二に、神がこのような純粋思惟内容の中から、この感覚的世界の範型として、自己の外部に表出したいわゆるイデアの総体としての「英知的世界」を意味する。フィロンが本来的意味で「神のロゴス」と呼ぶところのものは、この第二の意味の「ロゴス」であること」、「フィロンはイデアをプラトン哲学の本来的意味で理解し」（286-297）、
「第三に、以上「英知的世界」の模写としてのこの感覚的世界が造られたということは、「神のロゴス」がこの世界に内在化され、「世界法則」、あるいは「人倫の原理」として、万物を結合、保持、存続せしめる力として働くことを意味するのである」（287）。
「フィロンがプラトンから学んだ「範型―模写」の図式は、世界創造における創造者と被造物との根源的な象徴的関係性を示す基本的図式として、新たな意味が付与されるに至ったのである」（288）。

（２）アウグスティヌス（354-430）
「アウグスティヌス、意志の最初の哲学者」「彼は、生涯、哲学に固執したことによって最初のキリスト教哲学者になったのである」（ハンナ・アーレント『精神の生活　下　第二部意志』岩波書店、102）。

３．『創世記逐語註解』（『アウグスティヌス著作集16』教文館）

訳者（片柳栄一）解説
「アウグスティヌスは創造の二つの段階ともいうべきものを考えており、第一のものを、「初めに、神は・・・・」が示し、第二のものを「光あれと神は言われた」という言葉が示しているとする。・・・原初にあるものによって、神に由来するが、なお不完全な被造物の始めが暗示され、御言葉であるものによって、創造者へと呼び出された被造物の完全性が暗示されている。・・・御父に常に変わらずよりすがり結合して御父とまったく同一である形相を、おのおのの類に応じて倣うことによって、被造物は完全に形成されるのである。」（366）
「霊的被造物は forma なる神の御言葉を認識することによって形成されるのである。認識が存在の本質に属しているのである。決して形成されたことを認識するというのではなく、神に御言葉の認識が形成なのである。そうした在り方が、彼によれば、物体的存在と区別された霊的被造物の特性なのである。」（367）
「この創造の二つの段階は、時間的区別ではないことである。」（368）
「創造という考えの根本にあるのは、被造物の創造者に対する関係の、絶対依存的性格である。しかもその依存は外的である。」（370）
「アウグスティヌスも二つのテキストの顕著な相違に気づいている。」「アウグスティヌスはこの箇所を創造についての繰り返しの言葉とは考えず、ここまで暗示的に示してきた創造の二つの異なった時限についての彼の説、つまり創二・三までは原因的理拠の創造について述べているのに対し、二・四以降はこの理拠に基づく具体的事物の創造、展開と述べているとする考えを聖書の言葉に対応させてより詳細に開陳する。」（382-383）

４．『告白』（山田晶責任編集『アウグスティヌス』中央公論社）
第11巻、12巻
「あなたとひとしく永遠なる御言によって、語りたもうすべてのことを、同時にかつ永遠に語りたもう。そして、あなたが生じるようにと語りたもうすべてのものは生じ、しかもそれは、あなたが語ることによってお造りになるままに生じます。」（7/408a）
「神よ、あなたはこの始原において天地をお造りになりました。すなわち、御言において、御子において、御力において、あなたの知恵において、あなたの真理において、奇しきしかたで語り、奇しきしかたで造りたもう。」（9/409b）
「時間がなかったところには、「そのとき」などもなかったのです」、「あなたの年は、すべてが同時にたちどまっています。」（13/413a,b）
「あなたは、あなたから出る始原において、あなたの実体より生まれた知恵において、何ものかを無からお造りになりました。」（12・7/444a）

＜参考文献＞
１．荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』大阪書籍。
２．市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
３．秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学出版会。
　　『ヨセフス――イエス時代の歴史家』ちくま学術文庫。
４．秦剛平訳『七十人訳ギリシャ語聖書』全５分冊、河出書房新社。
５．ヨセフス（秦剛平訳）『ユダヤ戦記』全７巻、『ユダヤ古代誌』全20巻、『アピオーンへの反論』、『自伝』山本書店。
６．平石善司『フィロン研究』創文社。
７．グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』教文館。
８．土岐健治『初期ユダヤ教研究』新教出版社。